

平成 21 年度テーマ展

# 時代のものさし～中世～ 展示解説

## 土器のうつりかわり

中世とは、平安時代の終わり頃（11世紀後半頃）から戦国時代末（16世紀）までを指します。

古代の土器・陶磁器は、在地生産された須恵器や土師器と少数の緑釉陶器など他の産地の焼物で構成されます。しかし平安時代の後半、律令制度が解体していく頃には、供膳（食器）、煮炊（鍋・釜）、調理（鉢）、貯蔵（壺・甕）という器の用途ごとに分業生産を行う、中世的な土器様式へと変化します。

つまり中世になると、在地生産の供膳・煮炊具、広域流通品の調理・貯蔵具、貿易品の供膳具と高級品という、違った産地の土器・陶磁器の組み合わせが一般的になっていくのです。

そして、その組み合わせも時代とともに変化します。ここでは、12世紀後半～13世紀中頃、14世紀頃、16世紀という3時期を取り上げて、土器・陶磁器のうつりかわりを見てみましょう。



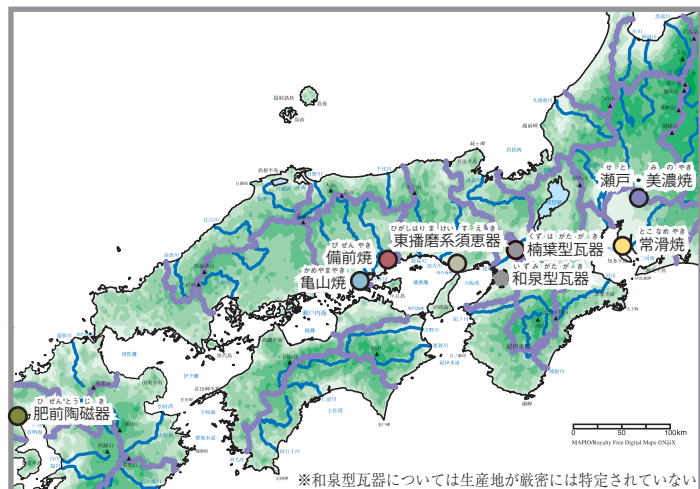
12世紀後半～13世紀中頃の土器・陶磁器



14世紀頃の土器・陶磁器

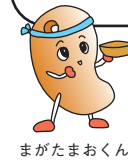


16世紀の土器・陶磁器



愛媛県で出土する焼物の生産地

中世の社会では、儀式・儀礼、宴会、宗教行事といった場で、大勢で一緒に飲食することで、人間関係を確認しあったんだ。そのときには「かわらけ」（土師質土器杯・皿）が使われて、そのまま捨てられたから、土器だまりなどでまとまって出土することが多いんだって！



南江戸鬮目遺跡土器溜まり3

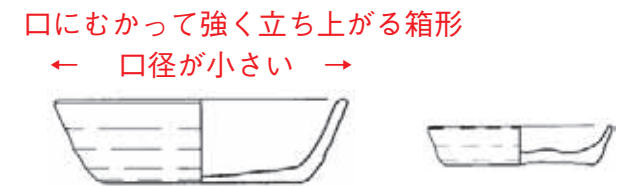
### 注目ポイント 土師質土器杯・皿はこう変わる！

12世紀後半～13世紀前半頃



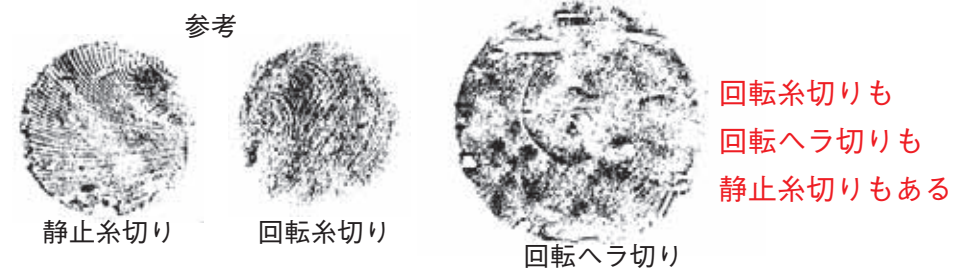
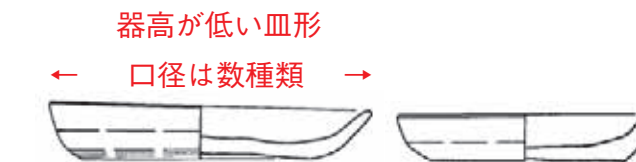
回転糸切り (Rotational cord-cutting)

14世紀頃



回転糸切り (Rotational cord-cutting)

16世紀



回転糸切りも  
回転ヘラ切りも  
静止糸切りもある

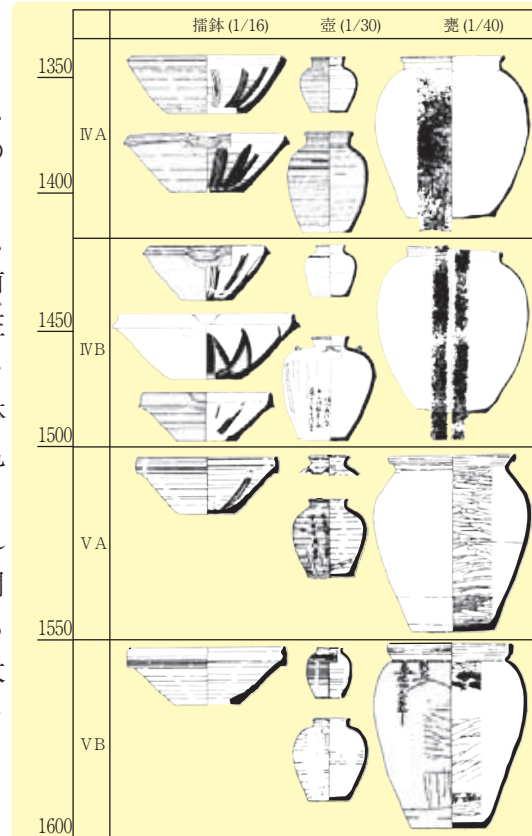


### 各地の焼物

ここでは、遺跡から出土する土器・陶磁器のうち、愛媛県以外の国内の生産地から持ち込まれたものを紹介します。

主なものとして瓦器、東播磨系須恵器、常滑焼、瀬戸・美濃焼、亀山焼・亀山焼系瓦質土器、備前焼を取り上げました。県内出土の中世土器は、在地で生産されたもの以外では、供膳具である碗・皿は瓦器と瀬戸・美濃焼、調理具である鉢や播鉢は東播磨系須恵器と備前焼、貯蔵具の壺・甕は亀山焼と備前焼が多く認められます。

各土器・陶磁器は、生産地も異なり、生産された時期にも違いがあります。またそれぞれが時間の経過とともに形を変化させていきます。これらの焼物の形は、遺跡や遺構の時期を決める上で大変重要で、形の変化を図にまとめた編年図は土器・陶磁器を調べる上で基本となります。実物と見くらべながら、形の変化を観察してみましょう。



備前焼の編年図  
(14世紀後半～16世紀)

重根弘和 2005 「中世備前焼に関する考察」九州古文化研究会編『古文化談叢』第54集、乗岡実 2005 「備前」『中世窯業の諸相』より作成

#### ●瓦器

瓦器は、中世前期に畿内（近畿地方）中心に生産された焼物です。精選された胎土や薄い素地、灰黒色の色調、器壁に施されたミガキなどが特徴的な土器で、碗と皿があります。



瓦器碗

左：南斎院土居北遺跡 右：南江戸鬮目遺跡出土

#### ●瀬戸・美濃焼

瀬戸窯は、愛知県瀬戸市を中心に分布し、12世紀末頃から施釉陶器の生産を開始した窯の総称です。施釉陶器は国内では瀬戸窯でのみ生産されました。15世紀頃には美濃にも窯が築かれたので、瀬戸・美濃焼と呼んでいます。



甕

大相院遺跡出土

#### ●東播磨系須恵器

東播磨系須恵器は、中世前期を中心に兵庫県明石市の魚住窯跡と神戸市の神出窯跡に代表される窯で生産された須恵器の総称です。12世紀後半頃から、片口鉢と甕が西日本で広く流通しました。

#### ●常滑焼

常滑焼は、愛知県常滑市を中心として知多半島に窯が分布し、12世紀はじめ頃から生産が開始されたと考えられています。碗や壺・甕、鉢などを生産しました。



甕

正法寺遺跡出土

#### ●亀山焼・亀山焼系瓦質土器

亀山焼は、岡山県倉敷市で13世紀前後から生産を開始した須恵器で、甕や鉢、瓦などを焼成しました。特に外面の格子叩きが特徴的な甕は、13～14世紀代には西日本に広く分布します。

14世紀に亀山焼の生産は終了しますが、その技術を受け継いで、備後地方で生産されたと考えられている瓦質土器が亀山焼系瓦質土器です。甕、鍋、播鉢などがあり、亀山焼と比較すると焼成が軟質です。



甕

大相院遺跡出土

#### ●備前焼

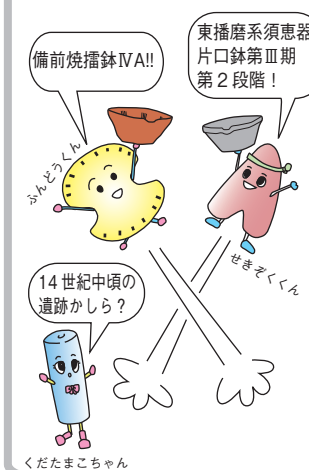
備前焼は、岡山県備前市で12世紀中頃から生産を開始した焼物で、14世紀以降に堅く焼き締めた製品が生み出されると、壺・甕・播鉢の三器種を中心に流通が広がります。壺や甕は、口の部分を折り返して玉縁にし、播り目を入れた播鉢も帯状の口作りとするなど、独自の形をした丈夫な焼き物を生産しました。



小壺 壺 播鉢

さんの遺跡出土 古照遺跡出土 南斎院土居北遺跡出土

#### 考古学ふち知識 クロスデーティング！



土器・陶磁器を「ものさし」にした時間軸を「相対年代」といいます。相対年代だけでは実年代がわかりませんが、各地域の土器・陶磁器がいっしょに出土することによって、実年代のわかっている地域と比較して年代を決めていくことができます。このような方法をクロスデーティング（交差年代決定法）といいます。

中世の遺跡では、いろいろな地域からもたらされた土器・陶磁器が出土しますからクロスデーティングがしやすく、この方法をもちいて何世紀頃の遺跡かを判断しています。

くだたまこちゃん



### 貿易陶磁器の世界

貿易陶磁器は、国境を越えて輸出・輸入された陶磁器の総称です。日本では近世まで磁器を焼成できなかったため、中世遺跡から出土する磁器は全て輸入品です。

中世の最大の陶磁器輸出国は中国です。県内で出土する貿易陶磁器もほとんどは中国製で、青磁・白磁・青花（中国製染付け）が代表的です。ほかにも韓半島や、タイ・ベトナムなど東南アジアのものもみられます。

貿易陶磁器の多くは碗・皿などの食器類です。これらは11世紀後半頃に急激に輸入量が増加し、12世紀には愛媛県でもたくさん出土するようになります。

それ以外に、香炉や盤、瓶類など高級な陶磁器があり、聞香や茶という文化にともなって、あるいは宗教的な場所や儀式、宴会などで使用されたり飾られたりしました。これらは寺院や城郭など特定の遺跡を中心に、文化的装置としての役割を果たしていたのです。



青白磁合子  
身：八町遺跡出土  
ふた：道後今市遺跡出土



青磁香炉  
湯築城跡出土



ベトナム製白磁碗  
道後町遺跡出土

### 貿易陶磁器のうつりかわり



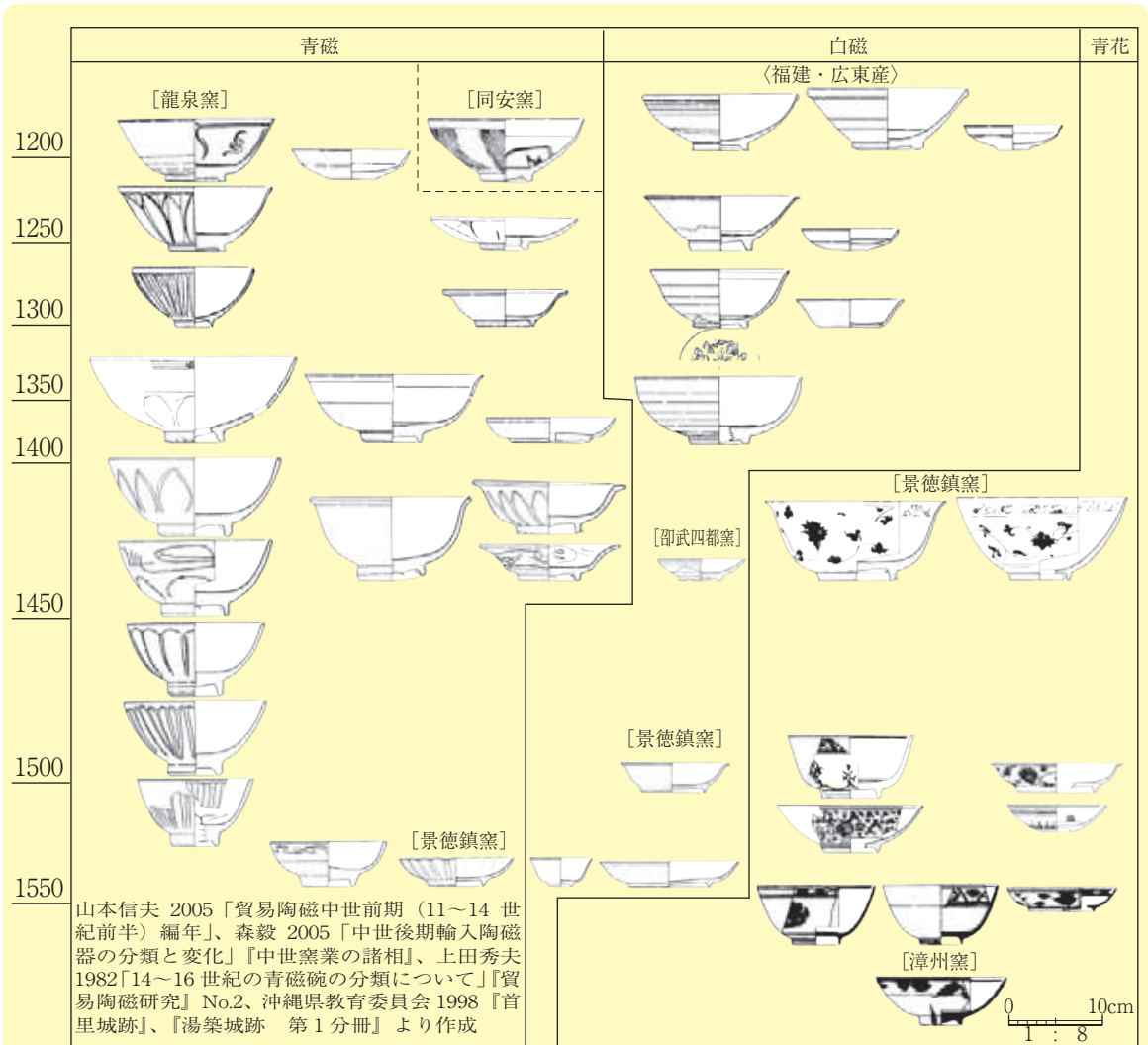
12世紀後半から13世紀前半



13世紀後半から14世紀



16世紀



中国陶磁器碗・皿・杯の編年図

### ●貿易陶磁器の編年

12世紀には福建・広東産の白磁が大量に出土し、13世紀以降、それに替わって龍泉窯青磁が主流となっていきます。

15世紀以降に景德镇窯産の青花が出土し始め、16世紀にかけて青花・白磁が増加します。龍泉窯青磁は減少し、16世紀後半にはほとんどみられなくなります。また16世紀末には漳州窯の青花が一定量含まれるようになります。

貿易陶磁器は長期間使用されるため、出現時期より年代が下る遺跡から出土することがよくあります。

### 注目ポイント 貿易陶磁器は底部を観察！

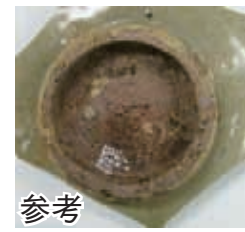
底部の高台のけずり方や、釉薬のかけ方、かける範囲は時期によって変化します。龍泉窯青磁碗を例にしてみると・・・



12世紀後半



13世紀後半



参考

14世紀後半



参考

15世紀後半



ふんどろくん



## 中世のいろいろな遺跡

愛媛県内で発掘調査された中世遺跡には、城郭、館跡、寺院跡、集落などがあります。

城郭は、平山城や山城、そして海城があり、立地や形態が多様です。愛媛県の中世を特徴付ける遺跡として、湯築城跡(平山城)、河後森城跡(山城)、能島城跡(海城)は国史跡に指定されています。また、同じく国史跡である等妙寺旧境内は、大規模な山岳寺院跡で、中世における重要な要素である宗教施設の実態を今に伝えています。これらの遺跡では、発掘調査が継続的に実施され、多くの成果があがっています。そして、ほかにも多様な遺跡が調査され、礎石建物や掘立柱建物などの建物跡や道路、溝、井戸、墓、耕作地などの遺構が発見されています。

ここでは、さまざまな性格の遺跡の代表例を挙げて紹介し、特徴ある遺構や出土遺物を紹介し、中世の世界をのぞいてみましょう。



漆椀  
南斎院土居北遺跡出土



和鏡  
平田七反地遺跡出土

### ●守護居城と城下

湯築城跡 松山市・国史跡

湯築城跡は、二重の堀と土塁をめぐらせた平山城です。湯築城を築城した河野氏は室町幕府から守護に任じられたので、湯築城は守護居城として政治、軍事、文化の中心となりました。

道後町遺跡 松山市

湯築城跡の西側に隣接する遺跡で城下と考えられます。



湯築城跡出土遺物



今治市教育委員会提供

能島城跡と宮窪の町

### ●海城

能島城跡 今治市・国史跡

能島城は大島と伯方島の間にある能島・鯛崎島に築かれた城郭です。このように小さな島などを利用した城を海城といいます。能島城はその代表的なもので、能島村上氏の居城と考えられています。

### ●山城

河後森城跡 松野町・国史跡

河後森城跡は、松野町中心部、三方を川に囲まれた地点の丘陵先端を利用して築かれています。稜線部に連続して曲輪を設け、最も高い「本郭」を中心に西から南にかけて九つの曲輪、東側に七つの曲輪を馬蹄形に配置しています。やや南の「新城」付近にも多くの曲輪が存在し、城域は20ヘクタール以上と広大です。



南斎院土居北遺跡の方形館

### ●寺院跡

等妙寺旧境内 鬼北町・国史跡

等妙寺旧境内は、鬼北町南西部に連なる鬼ヶ城連峰のうち郭公岳から北麓にかけて立地する山岳寺院跡です。元応2(1320)年に理玉和尚によって開山され、天台律宗系の密教道場として、七堂伽藍、12坊、山王二十一社などを整え、末寺は72ヶ所と伝えられています。



鬼北町教育委員会提供

等妙寺旧境内(本坊跡)の石積み



南江戸鬮目遺跡2次調査全景

### ●集落遺跡

南江戸鬮目遺跡 松山市

南江戸鬮目遺跡は、松山平野北部大峰ヶ台丘陵南裾に立地しています。この遺跡周辺には古照遺跡や松環古照遺跡があり、松山平野において中世の遺跡が最も密集してみつまっている地域です。

中世の集落遺跡は、荘園内の村や津・湊に接した港町、あるいは街道沿いの宿や市町、城下町や門前町など実際には様々な呼称で呼ばれた空間の総称です。



河後森城跡出土瓦

松野町教育委員会 1999  
『史跡 河後森城跡』より転載



### ●方形館

南斎院土居北遺跡 松山市

南斎院土居北遺跡でみつかった方形の区画溝は、幅2.5m、深さ0.68m、検出長は1辺が約50m(半町)あり、方形館を取り巻く溝と考えられています。

方形館とは、周囲を堀や溝、土塁などで囲った方形のプランをもつ館などの居住域を指し、有力武士の居住が想定できます。



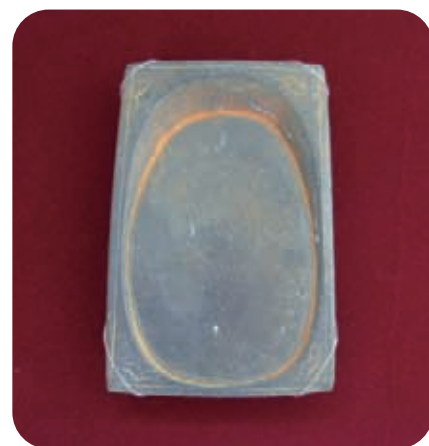
### 中世のいろいろな遺物

中世遺跡からは、土器・陶磁器以外にも多様な遺物が出土します。生活に密着した道具類はもちろん、生産に関わる道具や武士たちが身につけた武具や武器、住居に使用された釘や金具類などが挙げられます。

なかでも中世の人々の生活道具は多彩です。木製品の椀や下駄、杓子。調理に使われた粉挽き臼や石鍋、お茶の葉を粉末にした茶臼。刃物や刀を研いだ砥石。さらに文字を書くための文房具である硯や、文字や絵が描かれた木簡、土器なども出土します。そして、中世の日本で流通していたお金である銅銭。

これらのさまざまな遺物は、中世の人が記した記録や絵画の世界が、現実としてそこに存在したことを、私たちに実感させてくれます。

ここではそのような多様な遺物をみてみましょう。



硯  
八町遺跡出土



茶臼  
上臼：南斎院土居北遺跡  
下臼：湯築城跡出土



砥石  
左・右：湯築城跡  
中央：南斎院土居北遺跡出土



石鍋  
馬越遺跡出土



杓子  
登畑遺跡出土

### ●銭貨

中世の銭貨は、丸い形に四角い穴の開いた銅銭です。中世の日本では独自の通貨を発行していなかったため、中国の銅銭を輸入して使用していました。

1枚が1文、1000文が1貫文という単位で、当時の記録では、土師質土器皿の小さいものが100枚で100文、大根5把25文、米1石(約150kg)1貫文くらいの物価でした。

銅銭はものを買入したり、ものの価値基準の単位として使用されたのはもちろんですが、「地鎮め」の祭祀を行ったときに柱穴や土坑に埋納されたり、お墓に副葬品として入れたりしました。また、数千枚もの銭貨を壺や甕、木箱などに納めて地中に埋めている例が多くあり「埋納銭」「一括大量出土銭」などと呼ばれています。

堺や京都では、銭貨の鑄型が発見されていて、各地で偽金作りが行われていたことがわかっています。



大相院遺跡出土  
「皇宋通寶」

### MEMO

Blank lined area for notes.

### 財団法人 愛媛県埋蔵文化財調査センター

The Ehime Research Center  
for Buried Cultural Properties



〒791-8025

愛媛県松山市衣山4丁目68番地1

<http://pc2.ehimemaibun-unet.ocn.ne.jp/>

TEL 089 (911) 0502

FAX 089 (911) 0508

主催／財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター 後援／愛媛県教育委員会